田久保静香

若手注目作家

2022 年 6 月

田久保静香独占インタビュー(後編)

６月17日から開催の個展に向けてカップ＆ソーサーに特化した制作を行う田久保静香さんを独占インタビューしました。後編では田久保さんが尊敬する人物や今後の展望についてお伺いしました。

Josephine H8.4 x W11.3 x D8.5cm（カップ）　H3.0 x W16.3 x D16.3cm(ソーサー)

—使い易さと、デザインの比率についてはいかがお考えですか。

田久保:そうですね。私の中では使いにくくてもいいんですが、使えない器っていうのは抵抗があるので全ては様式美に則ってデザインをしています。

以前自分の作品を英語でプレゼンする機会を頂いて、その時に日本の工芸史を外国の方に説明するのってすごく難しいし、まわりくどくて、自分の器をどうやって説明するかと考えた時に、自分の作品は彫刻だと表現するのが一番しっくりくるような気がしたんです。お皿という舞台の上に立体物を立ち上げていくようなイメージで作品を成立させる事を意識しています。ただ彫刻だと意識しすぎると、カップの高さがどんどん高くなったりもしますし、バランスを取りながら分析をしていますね。

—作陶されていて思い悩んだことはありますか？またどうやって気分転換をされるのですか？

田久保：思い悩むことが常々ですね。コロナの直前まで山形にいたので、仲間と会って話してストレス発散させたりもしていましたけど千葉に帰ってからはあまり出歩ける雰囲気でもなかったので、ランニングしたり、ヨガをしたりと心身を健康にする事を意識するようになりました。それがどのように作品に影響しているかは正直分からないですが(笑)　あとは千葉に来てからは美術館やギャラリーに行きやすくなったので、綺麗なものを見て刺激を頂いていますね。でも思い悩んでもやっぱり作り続けなければ答えはでないと思っています。

—目標にされている方はいらっしゃいますか？

田久保:　八木一夫さんです。時代を築いたという意味ですごくリスペクトしています。美術と工芸の溝を埋める為に尽力された方ですが、彼に憧れた下の世代の人たちが学ばずに物を造り続けてきた怠惰さが現代の美術と工芸の距離をより広げてしまったように思います。なので私は、工芸史という歴史性を知った上で何を作るべきなのか、未来に何を残していくべきなのかを考えながら作っていく事を伝えていきたいです。凄く地味な事かもしれませんが、八木一夫さんみたいに時代に名前を残せるような、そんな生き方をしたいです。

—陶芸をされていて一番やりがいを感じる時はどんな時ですか？

田久保：もちろん一番はいい作品ができた時に興奮を覚えます。また私は工芸の世界で戦いたいと思っているからこそ、工芸のギャラリーでお世話になる事が多いのですが、工芸のギャラリーというのは棚にズラっと作品を並べる事が多く、美術として見せたい、一点一点展示台にのせたいと思っている気持ちにそぐわない事もあります。なので逆にそういう自分の理想に近い形で展示ができた時はすごく嬉しいですね。

―これから挑戦していきたいことはありますか？

ワンランク上の仕事ができたらいいなとは思っています。一点一点今以上に手をかけた作品を作りたいと思っています。あとはまだまだ構想の段階ですが、私の作品のドローイングを平面作品にできたらなと思っています。作品を展示する時に一緒に、カップ＆ソーサーの展開図のような銅版画も壁にかけてカップ＆ソーサーの小さな美術館みたいにできたらいいなと思っています。

田久保静香さんのインタビュー記事いかがでしたでしょうか？

若くして、作品一つ一つに歴史的背景を取り入れ、未来に何を残していくか常に考えて現代陶芸界をリードする田久保静香さん。

ぜひこの機会に彼女の華麗なる作品群をお愉しみくださいませ。

田久保静香展は 2022 年 6 月 17 日(金)から 6 月 30 (木)まで開催致します。

皆様のご来廊お待ちしております。

©2022 Tosei Kyoto Gallery. All Rights Reserved